

ニュースリリース

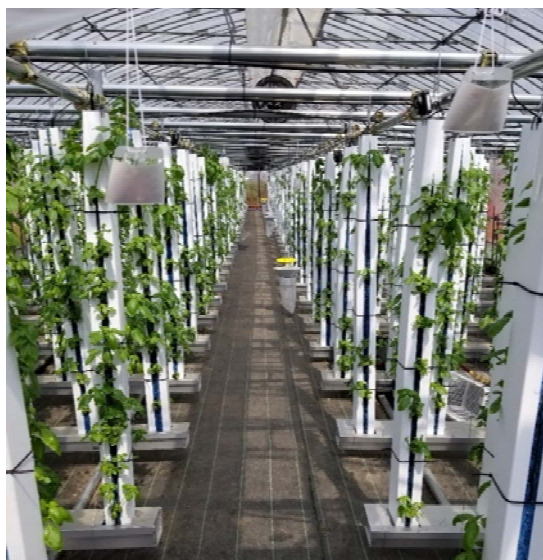
**グリーンリバーホールディングス、日本最大級のバジル生産植物工場の稼働を開始
2018 年 9 月より国産加工用バジルを全国に安価で提供**

【本リリースの概要】

IOTを活用した農業を推進するグリーンリバーホールディングス株式会社(本社:福岡県、代表取締役:長瀬勝義)は、同社が独自開発した縦型水耕栽培装置である「3D 高密度栽培」を利用した、バジル生産向け植物工場(スマートアグリファーム)が、福岡県久留米市において7月より稼働開始いたしました。同設備で生産されたバジルの初出荷は 2018年9月から予定しており、年間の生産量を 160t(トン)と見込んでいます。生産されたバジルは主に国産加工用原料として大手調味料メーカー等に向けて供給を行う予定です。

また、同社は、岡山県や栃木県でもスマートアグリファームの建設を予定しており、すべての植物工場が稼働開始するとバジルの生産量は全体で年間 200t(トン)を超え、日本一の生産圃場(一部契約栽培農家を含む)を有する企業となります。

<スマートアグリファーム内部>



<スマートアグリファーム外観>

**【3D 密植栽培とは】**

同社傘下のジーマテック株式会社が開発した、縦型水耕栽培プランター「バイグロウ」装置を使った密植栽培方法です。高さ 150cm の縦型プランターの両面に 18 株の苗が定植できる栽培方法で、一般的な露地栽培と比較して面積比 10 倍以上の収穫が可能な水耕栽培方法であり、葉物野菜全般に対応できる栽培

法となります。また、縦型プランターに養液、湿度、温度等を IOT 制御することにより、従来の農業と比較して簡易な管理で栽培することが可能になります。また、圃場の状況もモバイル端末によって確認、制御可能なシステムになります。

【国産バジルの状況】

イタリアンレストランのメニューを中心に使用される人気のハーブバジルは近年の農業従事者の減少と高齢化により、国内での生産量は年々減少傾向にあります。また、「べと病」という病気の発生によりさらに生産量は低下しています。加工食品の原料となるバジルは大手加工メーカーを始め調達が困難となり、海外からの輸入品が市場の多くを占めています。

しかし、安心安全を求める消費者のニーズは年々高まっており、輸入品から国産への切り替えは急務となっています。

<栽培中のバジルの様子>



【IoT を利用する事でファームを分散化し生産リスクを低減】

同社のスマートアグリファームは、岩手県八幡平市(2017年9月より出荷開始)、福岡県久留米市、宮崎県都城市にあり、近年の異常気象による生産リスクを低減するうえで分散化されていますが、IoT を駆使し遠隔地でも制御可能なシステムを搭載する事で生産管理の一元化を可能にしています。このシステムにより安定的な供給が可能となりました。

【今後の予定】

同社の縦型水耕栽培装置を利用した他のハーブ類の実証は既に開始されており、今後はスペアミント等の国産香料原料の生産・販売を展開していく予定です。

【本リリースに関するお問い合わせ先】

グリーンリバーホールディングス株式会社 東京支店 社長室

TEL:03-5289-7318